

# ワークショップ：心に届けることばの表現

橋田 光代<sup>1,a)</sup> 塩見 智子<sup>2,b)</sup> 片寄 晴弘<sup>3,c)</sup>

**概要：**「心の動き」は、その本質において、時間軸上における表現の意図や技法の追求が不可欠となる。時間軸上で定義される「心の動き」のデザインと受容の様相を分野横断的に捉えていくべく、時系列表現ワーキンググループを立ち上げ、活動を開始した。本セッションでは、ナレーターや司会など声の業務に長年携わったプロフェッショナルの立場から、「言葉と声」における演出の位置付けと表現手法、声ならではの表現と他の表現領域との共通事項について、ワークショップを交えつつ議論する。

## 1. オンラインにおける「声」の重要性

2020年からの新型コロナウイルス感染対策の影響により、学会に限らず、講義・演習、研究ミーティング、諸会議など、あらゆる対人コミュニケーションがオンラインで実施される機会が格段に増大した。2021年秋に緊急事態宣言が全面解除され、徐々に対面形態も戻りつつあるが、この約一年半をかけて、個人、コミュニティ、社会の各レベルで整備が進んだテレワーク環境は、今後も引き続き推進されていくことが期待される。

オンラインでのコミュニケーションは、個人の単位で見れば物理移動という距離の制約がなくなり、ワークライフバランスを取りやすくなるという点に大きなメリットがある。一方、授業や研究会などの場面においては、対面時と異なり話者同士が必ずしも画面越しで顔を映しているとは限らない。発信者の側からすれば相手の細かな顔の表情や身体動作、仕草などを読み取ることが対面時より困難を感じる場面が増え、受信者の側としては、長時間にわたる聴取に多大な疲労を伴うという事態も起こっている。

これらの状況から示唆されるのは、オンラインコミュニケーションにおける通信手段として、話声の比重が極めて高くなったという点である。視覚を通じて得られていたノンバーバル情報を、オンラインでは聴覚で得ようとする中で、慣れない身体感覚を長時間酷使することにつながっていることが考えられる。今後もオンライン環境を維持していくには、従来以上に「聞く」「話す」に関する種々の技法について、個人でできる範囲のことからスキルアップを

図ることが必要になると思われる。

## 2. 時系列表現としての「声」の技法

パフォーマンス分野では、表現者自身の感情の高揚に端を発し、必ずしも言葉の利用を前提としない時系列表現がなされている。名人、名作と呼ばれる芸術に触れ、鑑賞者が感動するのは、表現者の身体動作や空間環境における演出の効果であり、また鑑賞者自身が持つ体験知との共感、共鳴の結果であるとも言える。さらに、インターネット配信を含むライブパフォーマンスにおいては、鑑賞者の反応は即座に表現者にも伝わることから、実時間レベルでの密度の高いコミュニケーションが行われている。

話声の表現とは、記述された言葉を利用すると同時に、その言葉に対応する基本の「音」を、話者の感情や意図の要素を加えて発することで成り立つものである。演劇や落語といった舞台芸、話芸に限らず、日常会話においても、話声の表現に工夫を施すことで、コミュニケーションが円滑になったり、相手への印象評価に大きな影響を与えることが可能となる。これらの様相を掴むにあたっては、(1)話し手の視点、(2)聴き手の視点、(3)インタラクション場(環境)の視点など、多種多様な視点から「演出」や時間的推移を捉えていくことが必要となる。

本稿の発表にあたっては、ナレーターや司会など声の業務に長年携わったプロフェッショナルの立場から、「言葉と声」における演出の位置付けと表現手法、声ならではの表現と他の表現領域との共通事項について、ワークショップを交えつつ上記の点について議論する。

**謝辞** 本稿の準備にあたっては、公益財団法人 柏森情報科学進行財団の助成を受けた。

<sup>1</sup> 福知山公立大学

<sup>2</sup> (有) ビー・グラッド

<sup>3</sup> 関西学院大学

a) hashida-mitsuyo@fukuchiyama.ac.jp

b) vsp.presen@gmail.com

c) katayose@kwansei.ac.jp